

---

# 翼の上のアリオン

-聖-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翼の上のアリオン

### 【NZコード】

N4107D

### 【作者名】

-聖-

### 【あらすじ】

大国ロフレスクを襲撃する謎の『鳥』と、鳥の背に乗る少女。ロフレスク王国防衛団の一員であるレザは迎撃をきっかけに彼女と接触し、やがて事件に巻き込まれていく……。人間と自然とをテーマにした、本格派ファンタジーです。

## 第1話 空からの強襲 1・

フォルン大陸の北方を支配するロフレスク王国といえば、この半世紀で凄まじいほどの発展を遂げた国として有名である。森林を切り開き、土地を耕して、次々と工場を建設した。そして今となっては世界最大の工業国とまでいわれている大国だ。

そんなロフレスクの朝は、王国の中心部に高くそびえる『大地の塔』の鐘の音で始まる。ロフレスク産の中でも最高級の銀を使って作られたこの鐘の音色は、街の人々の心に響き、更には天地をも突き抜けるほどの澄んだ響きを持つのだった。

### カラーンカラーンカラーン

午前8時。その日も、大地の塔の鐘が響くと同時に人々の忙しい朝は始まった。作業服に身を包んだ男たちが一斉に工場や炭鉱へと向かい始め、やがて煙突からは黒い煙がもくもくと上がる。また女たちはパン屋の看板を表に出し、あるいは談笑ながら農場へと向かい、町には活気が溢れ始めるのである。

すべてが平和に見えるロフレスクにも、しかし悩みの種があつた。それは防衛団の存在を見ても分かるであろう。王城の周りには大した人数の防衛団は配置されていないのであるが、町の中、とくに郊外では、至る所に防護服に身を包んだ団員たちが立っている。ここ数十年間であまりに急激な開発を行つたために付近の森の生態系が崩れ、人々に危害を及ぼすような異常な生物が現れるようになつた。彼らは繁殖力が以上に強く、ロフレスクの誇る近代兵器をもつてしても殲滅することはできない。仮に討伐のために森での攻撃を行えば、さらに生態系が崩れ状況が悪化しかねないのである。

そのため現時点では町の周囲に防衛団員を配置し、町に侵入しようとする生物のみを排除するという方法が最善であった。その防衛団の拠点となるのが、東西南北とその間の計8箇所に建てられた通称『たいまつ塔』である。この塔の付近で危険を察知した場合、そ

れを周知するために塔の頂に炎が灯されることからそのような名前で呼ばれている。

以前は森や山から下りてくる危険生物が発見されると炎が灯されていたが、近年はそれだけではなかつた。空……そう、空からの侵入者が、ロフレスクを齎かすようになつたのである。

「『鳥』だ、『鳥』が来たぞ！」

防衛団員の男が叫ぶ声が聞こえた。それを皮切りに、平和だつたロフレスクの東側の一角は突如として混乱に陥つた。

東のたいまつ塔には大きな炎が灯され、付近の工場からは作業員の男たちが我先にと飛び出してくる。その人々の間をすり抜け、たいまつ塔に防衛団員たちが集まつてきた。

東のたいまつ塔を指揮する『東の防衛隊』隊長であるコルダは、塔の窓から彼方の空の様子を伺つていた。その隣では副隊長のモージスが双眼鏡を覗き込んでいる。

2人はいずれも40歳前後の男で、小柄で落ち着いた雰囲気のあるコルダに比べ、モージスは大柄で血の多い男だつた。しかし、このような対照的な性格の組み合わせであるからこそ、2人の見事なコンビネーションの力が過去に幾度となく発揮されていた。

「またヤツか……。最近、ずいぶんと頻繁に来るようになつたな」コルダはあきれ果てたように言つた。団員たちの間で『鳥』と呼ばれているものは、近年このロフレスク王国に姿を現すようになつた。工場ばかりを狙つて破壊し、短時間で引き上げていくというパターンはいつも同じである。防衛団も捕らえようとするのだが、鳥の飛行速度は驚異的で、とても追いつくことができないのだ。

「ええい、トルカー隊の準備はまだか！」

モージスが額にしわを寄せながら荒々しく叫んだ。塔の下では団員たちが慌しく飛行型機動兵器トルカーの作動準備を行つていた。しかしそうしている間にも、次第に巨大な『鳥』が高速で接近している。

「父さん！」

階下から、跳ぶような足取りで石段を駆け上がりてくる若者がいた。彼はコルダの隣に立つと、窓から身を乗り出して遠くの空に目を凝らした。

歳の頃なら10代半ば。決して背は高くないが、鍛え抜かれた身体であることは一目で分かる。髪は父親のコルダに似たダークブラウンであるが、瞳の色は父親のそれとは異なる深い青。端正な顔立ちに、鋭さを持つ目が印象的な青年である。

「遅いぞ、レザ！ 何をやつていた」

「すいません」

モージスの怒声を、しかしレザと呼ばれた青年は慣れた様子で往なしながら、再び遠くの空へと目を移す。『鳥』はまるで防衛団の準備が整うのを待つかのように、減速をしながら近づいていた。とはいって、その姿は肉眼ではつきりと確認できるほどの距離だ。

純白と黄金の美しい体に、真紅の輝きを放つ瞳。その体は両の翼を広げると20メートル近くにもおよび、天を裂くようなスピードで飛行することができる。

そして、その背に乗る1人の人間の姿。全身をゆったりとしたフード付きのロープで覆っているため顔は見えないが、『鳥』と共に必ず現れる謎の人物である。恐らくは『鳥』の持ち主ではあるが、このロフレスクにやつて来る理由を知る者などいなかつた。

「今日こそとつ捕まえてやる。父さん、僕もトルカーで出ます」

たいまつ塔から次々と発していく団員を見ながら、レザが革のグローブとゴーグルをはめる。そして腰に携えた折りたたみ式の槍があることを確認すると、コルダとモージスに軽く一礼をしてから石段を駆け下りていった。

耳障りな機械音を発しながら、トルカーのエンジンが火を噴く。空を飛ぶことを可能にしたこの高性能の機械は、ロフレスク王国が数々の失敗を乗り越えて向上させた技術の賜物である。中でも鉱物から抽出した特殊な燃料の開発がなければ、トルカーの実用化はありえなかつた。

レザがトルカーに乗った時には、既に『鳥』はロフレスク領内に侵入してきていた。郊外に立ち並ぶ工場上空に滯空すると、その背に乗つた人物が手で合図を送る。

すると『鳥』の全身が輝き、そのくちばしの中に巨大な火の玉を生み出した。そして工場に目掛けて放つ。

「ドオォン！」という爆音と共に、工場が激しく炎上した。逃げ惑う労働者たちから絶叫にも似た悲鳴が上がり、付近は混乱の渦が巻き起こる。しかし、工場の中に残つた人はいない。不思議なことに、この翼をもつた破壊者による被害は物的なものだけにとどまり、過去に死傷者が出了ことがないものである。

とはいって見過ごすわけにはいかないことは間違いがなかつた。そのための防衛団であり、これまでのように『鳥』を逃がし続けたとあつては、防衛団の面子にも関わる事だった。

やがて、たいまつ塔から発進したトルカー隊が宙に集まり始める。機体の側面には、『鳥』を捕獲するために考案された巨大なネットを打ち出す飛び道具を装着している。

しかし『鳥』はトルカー隊の接近を決して許さない。団員たちが集まつてくるや否や、並外れたスピードで上空へと舞い上がつていった。恐らく引き上げるつもりであろう。毎回そうであるが、1回の『鳥』の襲来による被害は、平均して工場2つの被害程度なのだ。決して破壊の限りを尽くして去っていくということはない。多少の被害を加えると、すぐに逃げ出してしまうのである。

そして『鳥』が逃げに転じると、もはやトルカー隊では捕らえることができなかつた。トルカーの発揮できる性能では、とても追いつくことが出来ないのだ。しかもトルカーに使われている燃料はまだ量産のできない貴重な資源であるため、追跡しても燃料切れになる可能性が非常に高い。あらかじめトルカー隊を領空の警備に充てることができないのは、このような理由もあつた。

しかし、その日は『鳥』にとつて大きな誤算があつた。太陽の光を背に受けて、はるか上空から『鳥』めがけて下降してくる1機の

トルカーがいた。陽光のせいでその機影を捉えることが出来なかつたのか、空へ上昇していた『鳥』は真っ向からトルカーと向き合つする形となつた。

そのトルカーを操つてゐるのは……レザだ。ネット型の武器を使おうとするが、全身にのしかかる重力に耐えることに精一杯で操作に手が回らない。レザはゴーグル越しに真っ直ぐ『鳥』を見据えると、すれ違いざまにトルカーを強く蹴つて『鳥』に飛びついた。

『鳥』は回避行動を取つていたが、間に合つ距離ではない。レザは必死にしがみつき、『鳥』の翼にへばりつく形となつた。そして器用に移動しながらその背によじ登る。

そのレザを、ローブをまとつた謎の人物の持つ円形の武器が襲つた。片手で翼を掴んでバランスを保ちつつ、空いた手で折りたたみ式の槍を組み立てるレザ。武術の腕は、ロフレスク最強といわれたコルダ直伝だ。

鈍い金属音が響き、2人の武器が交錯する。何度か打ち合いを続けるが、しかしどうやらレザの方が一枚上手のようである。やがてレザの繰り出した槍の柄が、相手のフードを剥ぎ取つた。

「女!？」

レザは絶句した。フードの下から現れたのは、レザと同じぐらいの年齢と思われる少女だつた。流れるようなプラチナの髪を後ろでまとめ、その顔立ちにはまだ幼さが残つてゐる。彼女を一言で表現するならば、「神秘的」という言葉がぴつたりであろう。澄んだ漆黒の瞳には、何か相手を氣後れさせるほどの神々しい力があつた。

彼女は軽く唇を噛みしめると、鋭い視線でレザを睨み付けた。そして驚愕の余韻を残してゐるレザに不意打ちの体当たりを食らわせると、『鳥』に向かつて大声で指示を出す。

「キュレイ、振り落とすよ!」

それを受けて、キュレイといふ名の怪鳥が、低空飛行をしながら徐々に速度をあげていく。少女に突き飛ばされたレザは、からうじてキュレイの翼にしがみついている状態だつた。

少女はトルカ一隊の追つ手を振り払えていることを確認すると、キュレイに指示をして森の上を飛びよじにさせる。レザを森の上に落とそうというのだ。

森の上までやつてくると、キュレイは激しく翼をばたかせ始めた。しかし、レザも負けじと必死にしがみつく。

「お、落ちてたまるか！」

「キュレイ、早く！ 大陸を抜けてしまうわ

なかなかレザが落ちないのを見て、少女が焦りの色を浮かべる。先のほうには海が広がっていた。ここはもう大陸の端。海に落ちれば、レザは無事では済まないだろう。

「ぐ、もうダメだ……もたない」

レザの手が、徐々にキュレイの翼から外れていく。悔しそうに唇をかみしめるレザ。だが、次の瞬間にはその手はキュレイの翼から離れていた。

「しまった！」

そう叫んだときにはもう遅い。レザの体は、下の森に向かつてに落ちていく。そしてガサガサという音と共に、大きな葉を茂らせた木々の絨毯に受け止められた。恐らく大怪我をするには至らないだろう。

その様子を確認した少女は、思わず安堵のため息をついた。しかし、すぐに森の様子がおかしいこと気づき、その表情をこわばらせる。

吐き気すら感じる悪臭、茶色や灰色の植物、黒い木々、そして大量の塵を含んだ空氣。まさに異常ともいえるこの森は、人々が決して近づかない呪われた森だった。

「よりによつて『死の森』に……。キュレイ、大陸の端の海岸で待つていて。すぐ戻る」

その言葉が終わるや否や、少女はキュレイの背から飛び降り、深い森の中へと姿を消していった。

## 死の森

それはロフレスク王国の発展の犠牲になつた自然の末路である。以前、この森は大陸で最も美しい場所といわれていた。水も豊富な上に、空気も澄んでいて、更には貴重な資源もそこらじゅうに埋まっている。まさに自然の宝庫というべき美しい森だつた。

だからこそ、ロフレスク王国に目を付けられた。発展途上の彼らにとって、最高の環境を持つこの森は科学技術の実験を進めるのに最適だつたのである。やがて森の中心部にマルスローム研究所が建てられ、ロフレスク王国の科学技術研究部の拠点となつた。

しかし、15年ほど前に悲劇が起きた。それまで数々の研究を行い王国の発展に貢献してきたマルスローム研究所が、突如として大爆発を起こしたのである。さらに研究所からは多種の汚染物質や有毒物質が流れ出て、付近の森に充満した。

それ以来、美しかつた森の環境は無残なものへと変わってしまった。大地も木々も死んだ。生物たちは命を奪われ、あるいは毒に犯され、異形の魔物のような存在になるものまで現れた。

やがてこの森は人々から『死の森』と呼ばれるようになった。人の存在を拒む、正に呪われた森。人間が足を踏み入れたならば、充满する毒気のせいで2時間程度すら生きていることができないと言われている。

そんな森の中に落とされたレザは、茂る木の枝に絡め取られていった。汚染されているとはいっても、木はまだ生きていた。しかし、その葉は変色し、幹さえも灰色がかつていて、とても見るに耐えない有り様だ。

レザは地面に降り立つと辺りの様子を伺つた。この森が死の森と呼ばれていることは、当然ながらレザにも既知のことだつた。しかし、実際に足を踏み入れるのは初めてである。

森は不気味なほど静かで、ときどき遠くのほうでカサカサと植物の揺れる音がする。今にもどこからか獣が飛び出してきそうな気配だ。とても落ち着いていられる状態ではない。

何よりも、森に満ちている汚れた空気が、徐々に肺を汚染してい

くのが分かるのである。長居をしている余裕はない。

「早く出ないと……このままじゃ死んでしまう」

鼻をつく悪臭に顔をしかめる。そしてレザは服の袖で口を覆いながら、森の中を宛てもなく歩き始めた。

そもそもこの森は、大陸の最東端に位置している。ロフレスクか

らみれば、ちょうど王国の南東にあるのだ。そのため、ロフレスクに戻るには、まず森の中を北西へと歩き、その先にある平原へと抜けなければならなかつた。

しかし、レザは自分が方位を確認する術を持つていてないことに気づき、ふと足を止めた。その上に森は広大な広さを持つため、命が尽きる前に抜けることができるかも分からぬ。

「……」  
「ここまでか……。僕の道はこんなところで閉ざされてしまうのか」  
恨めしそうに空を見上げながら、そう呟く。木々の凶惡な影に阻まれ、広大なはずの空はわずかしか見えなかつた。先ほどまで、あの怪鳥の翼に捕まつて飛んでいた空が、この光すら届かない森と同じ世界にあることなど、信じがたい事実だ。

とはいっても、そのままじつとしているのはレザの性には合わなかつた。何もできないとモード、あがくべきである。せつ父から教わつた。

再びレザが足を踏み出そうとしたその瞬間、突如、刺すような圧迫感が襲い掛かり、何かが茂みの奥から飛び出してきた。姿を現したのは真っ黒い体を持った巨大なクモ。その大きさは人間と同じぐらいはあるだろうか。この大陸の森に住む生物の中でも最も好戦的な、オニグモと呼ばれる厄介な相手だ。

「今日はつぐづく運がないな。こんなことなら、無茶して『鳥』を追うべきじゃなかつた。今さら言つても仕方ないけど……」

ため息混じりにそういうと、レザは折りたたみ式の槍を取りうと手を伸ばした。焦りの色はない。なぜならば、過去にロフレスク領内に侵入しようとしたオニグモを何匹か仕留めたことがあるからだ。しかし、レザは思わず硬直した。常に携帯しているはずの槍がな

いのである。いくら戦つた経験があるとはい、武器がなければどうにもならない。

「しまった……どこかに落としてきたか」

キュレイの背で、槍を使ったのを思い出す。恐らく森に落ちたときにはどこかにいつてしまつたのだ。レザの額に冷や汗が浮かぶ。そんなことはお構いなしに、オニグモは臨戦態勢に入つていた。大地に鋭い8本の爪を突き立て、姿勢を低くする。次の瞬間には、強烈な勢いでレザに襲い掛かってきた。

為す術もなく、逃げ回るレザ。最初の攻撃は上手く身をかわしたが、次も運良くかわせるとは限らない。しかも、どういうわけか敵の動きが予想以上に速いのだ。

繰り出される攻撃を横とびに回避しながら、レザは相手を倒す機会を伺っていた。しかし、わずかに回避が遅れ、わき腹に焼けるような痛みが走る。オニグモの爪の先に肉を引き裂かれたようだ。

地の上の転がりながら相手との距離を取ると、レザは傷口を押さえながら、その痛みに表情を歪めた。このままでは、殺されるのも時間の問題だろう。

「やるしかない……。このまま殺されるなんて、絶対に御免だ」

決意を固めると、近くにあつた太い木の枝を手に取る。何もないよりかはましだらうが、通じるかどうかは確証がない。いや、むしろ通じない可能性のほうが大きいだらう。それでも、何もしないまま殺されるのだけは嫌なのである。

「下がつてなさい！」

レザが決死の覚悟で立ち向かおうとした時、背後で誰かがそう叫んだ。聞き覚えのある声だ。パッと後ろを振り向くと同時に、ローブ姿の少女がその横を素早く通り過ぎていく。

突然の参戦者に興奮したのか、オニグモは不気味な雄たけびを上げながら少女に向かつて鋭い爪を振り上げた。が、あっけなく少女の手にした円形の武器に、2本の足を切り落とされる。

「逃げます。走りなさい！」

オニグモが上手く体勢を立て直せないことを確認すると、少女はレザの手を掴んで走り始めた。足を失ったオニグモは満足に追うことができないようで、やがて2人の視界に入らなくなつた。

「すまない……」

傷んだわき腹を押さえながらレザがポツリとつぶやく。しかし少女は振り向きもせず、強張った表情でただ前を見据えているだけだつた。

ローブのふちを口に当て、毒氣を吸わないようにしている。そのせいが、もしくは独り言だつたのか、「氣まぐれです」と少女は素つ氣なく言つた。

しばらく森の中を走ると、木々の間から薦に覆われた廃墟が見え隠れしているのに気づく。石造りのその建物は、横には広いが高さはない。しかも天井の大半は吹き飛んでおり、壁も申し訳程度にしか残つていなかつた。

レザと少女はどちらからというわけでもなく足を止め、不気味に佇む廃墟にゆっくりと近づく。残つた壁の隅のほうに巣を作つていたモリネズミたちがその足音を聞きつけて散るように逃げていつた。廃墟の横には、縦長の墓石のようなものが乱雑に突き刺されている。レザはそこに刻まれた文字をゆっくりと読み、再び廃墟を一瞥した。

「マルスローム研究所、ですか？」

壁に這つている薦を剥がしながら、少女が言つ。

彼女の言つとおり、ここは15年前に爆発を起こしたマルスローム研究所だつた。事故が起きて以来、数回の調査が行われた以外はほとんど人が近づいておらず、そのまま建物だけが残つている。

横に立てられた墓石はその事件で亡くなつた研究員たちのために建てられたものだ。それを知つてから知らないでか、少女が墓石に近づき手で表面の塵を払つた。

その瞬間、彼女の表情が一変した。おもむろにふところから円形

の武器、満月刀と呼ばれる珍しい刀を取り出すと、墓石と交互に見比べ始める。

不思議に思ったレザが横から覗き込んで見てみると、満月刀の刀身と墓石のてつぺんに、同じ紋章が刻まれていた。4枚の翼を持つ鳥をかたどったシンプルなものだ。恐らくは家紋なのだろうが、見慣れない形をしている。

「これは……」

少女はしばらく黙りこくつていた。なぜマルスローム研究所の墓石に自分の刀と同じ紋章が刻まれているのか、当の本人にも予想がつかなかつたのである。

しかし、その沈黙は突如としてレザによつてやぶられた。小さく呻き声をもらしながら、レザが地面に膝をついたのである。傷口が傷むのか、額に脂汗を浮かべながら必死にわき腹を押さえている。

「オニグモの毒……」

傷口が縁に変色しているのが見えた。オニグモの爪には致死性の毒があり、じわじわと人間の肉体を蝕んでいくのだ。治すには解毒作用を持つ虹色ガメの甲羅を削つて飲むのが手つ取り早い。が、それもこの森を出なければできない話である。

レザは肩で荒く息をつきながら、近くの木を支えにして立ち上がつた。死の森の空氣のせいで余計に毒の回りが速いのか、顔色は青白く、足取りもおぼつかない。

それでも彼は喉の奥から声をひねり出し、必死に少女に向かつて言葉をかけた。

「僕は……いい。君こそ、早く森を……出でくれ」

しかし少女は廃墟の方を指差しながら言つ。

「あの上まで登る元気はありますか」

その指が示す先には、わずかな壁に支えられた廃墟の屋上が見える。幸運なことに、そこへ登る石造りの階段はボロボロになりながらも形を残していた。力を使ってよじ登るとなれば厳しいかもしないが、階段を上がるぐらいならできそうである。

「……努力はするよ」

登る理由は分からなかつたが、今のレザには彼女の言葉に従う以外なかつた。その気になれば彼女はこの場でレザを斬り殺すこともできるのだ。何よりレザは、恐らく彼女が嫌いであろうロフレスク王国の人間なのである。

レザはゆっくりと足を前に出し始めた。既に視界は歪み、思う方向に進むのも辛い状態である。オニグモの毒のせいでも息も荒くなっている分、死の森の毒氣をより多く吸い込んでしまつているのだろう。

「くそつ」

我が身の不自由さに、レザは小さな声で悪態をついた。その横からスッと手が伸びてレザの肩を支える。レザは思わず少女の顔を見た。しかし彼女は無表情のまま支えの役割だけをしてくれている。

「……名前は？」

「アリオン」

少女があつさつと自分の名前を口にしたことに、レザは驚きを隠せなかつた。さつきまでは謎の『鳥』に乗つた破壊者だつたのに、今は彼女……アリオンが非常に身近な存在に感じた。それは恐らく自分の体を支えてもらつているからといつわけではない。さつきまでのイメージと今のイメージとのギャップがあまりにも違ひすぎるのだ。

声は凜としているが、決してきつい印象はない。むしろ柔らかい響きを持つた優しい声である。しかもレザのことを気遣つてくれている上に、こうして助けの手まで差し伸べてくれている。果たして、彼女は何を考えているのだろうか……レザの頭にはその疑問だけがグルグルと渦巻いていた。

そんなことを考えている間にも、2人は屋上の上に到達していた。するとアリオンは腰に付けた革の袋から小さな筒を出し、筒の穴を開いた方を空に向けた。廃墟が立つてゐるため真上には木の枝も突き出でおらず、ほどよく白い雲に覆われた青空が見えている。

「音、しますよ」

パンツ！ という破裂音を立てて黄色い煙が空高く上る。さらに少し刺激的な甘酸っぱい匂いが風にのってあたりに散らばった。柑橘系の果物などを使って生成されたものだろうが、ロフレスクにそのような種類の果物はない。恐らくはアリオンの住む異国の中である。

やがてはるか上空に、雲を割つて降下してくる一つの影が見えた。どうやらアリオンがキュレイと呼んでいた、あの『鳥』のようである。

「合図したら上に跳んでください。跳ぶのが遅れたら怪我しますよ」「わかった

レザはうなずくと、わずかに腰を落として身構えながら上から降りてくるキュレイを直視した。毒のせいで目がかすむが、あれだけの巨体である。さすがに見えないということはない。あとは体が言うことを聞いてくれれば無事に拾つてもらえるだろう。

やがて徐々に減速しながら、キュレイが大きくカーブをし始める。2人を翼ですくい上げるつもりなのだろうが……確かに跳ぶのが遅れたら大怪我だ。

レザは息を呑みながらアリオンの合図を待つていた。彼女は集中した視線を向け、必死にタイミングを計つているようだ。

「今つ！」

アリオンが声を張り上げると同時に、半ば反射的にレザは地を蹴つた。キュレイによって生み出された突風が2人の体を持ち上げ、そこをうまく翼で拾つていく。こぼれ落ちそうになりながらもレザはなんとかキュレイの背の上に転がっていた。

そのままキュレイは加速をしながら上空へと上つしていく。レザは無事に死の森を脱出できることに安堵のため息をついたが、その横でアリオンは後ろを振り返りながら唇をわずかに噛んでいた。

見ればロフレスク王国のトルカー隊が3人ほど森の上を飛行している。レザを探しに来たのだろうが、突然のキュレイの出現に焦つ

た様子で真っ直ぐと突撃をしてきている。

「掴まつて下さい！ キュレイ、行って！」

人の言葉を理解することができるのか、キュレイはアリオンの言葉を受けて大きな一声を発した。そして翼を大きく広げ、さらに速度を速めていく。トルカー隊が引き離されていくのが目に見えて分かった。ロフレスクの技術力では、これほどの高速を体感できることはできないだろう。

もつとも、防衛団の仲間たちから逃げているというのは事実であるため、レザにとっては複雑な心境だった。かといって彼らと接触をすればアリオンは捕らえられてしまうだろう。そうなれば彼女は国の中法により処刑か、もしくは牢獄行きである。

今までアリオンとキュレイによつて攻撃をされていたのは確かに、レザには彼女が何か大きな理由を持つていてるような気がしてならなかつた。これからキュレイに連れて行かれるところは、アリオンの住む場所であろう。そこへ行けば、その理由も分かるかもしない。

「助かつたよ。僕はレザ」

死の森を抜けたことで澄んだ空気を吸うことができ、わずかながらレザに生気が戻りつつあった。健常ならばオニグモの毒がすぐに全身に回ることはないだろう。それを見計らつてレザは自分の名前を告げたが、アリオンはまったく相変わらずの無表情で言い放つた。「助けようと思つたわけじゃないですが、人が死ぬのは嫌いです。それに、ロフレスクの人間の名前にも興味ありません」

言つてのことには棘があるが、口調は決してきつくはない。これが彼女の性格なのかどうかは分からぬ。しかしどうやら好かれているわけではないというのは、レザにも理解できた。

それからは会話がまったくない時間が続いた。まるで走るように過ぎていく大地を上から見下ろしながらレザは口を堅く結んでいた。たまにアリオンを見るが、彼女は少しもレザのほうを向く気配がない。

諦めたレザは深くため息をつくと、そつと田を開じた。熟睡して落下してはたまつたものではないが、軽く休息をするぐらいの余裕はある。不思議なことに体に受けた風はトルカーに乗っているときよりもずっと少なかつた。これならば、しばらくの間は落ち着いて体を休めることができそうである。

レザは今一度アリオンがこちらに顔を向けていないのを確認すると、器用に身体を丸めて瞳を閉じる。傷のせいで休息が必要なことも確かだつたが、それ以上に、なぜか今日会つたばかりのアリオンに対して言葉にできない安心感を覚えているのだった。

いくらも経たないうちにレザは目を覚ました。いよいよ本格的にオニグモの毒が体に回り始めたのか、手足の指先が痺れてきたのである。こんなことでは落ち着いて横になつていることもできない。とはいえ実際、レザはそれまで熟睡をしていたわけではなかつた。ただ目を閉じて休んでいただけ、というほうが正確かもしれない。何よりも傷が痛む上に、本来は敵であるはずの『鳥』の背の上である。傷が痛むからといって警戒は怠れない。

レザは体を起こすと地上を見下ろした。一体どの辺りを飛んでいるのかレザには見当もつかない。下には青く澄んだ海が広がつており、ずいぶんと波も穏やかである。ふと、海面にクロイルカが顔をのぞかせているのが目に入り、レザは思わず微笑んだ。

ロフレスク周辺の海は荒れていて色も綺麗ではない。汚染のせいか、もしくは元々そういう質の海なのかは分からぬ。しかし少なくともレザが知る限りでは、眼下に広がつているような海とは比べものにならないほど淀んでいることは確かだつた。

「傷はどうですか？」

それまで黙つたまま正面を向いていたアリオンが、こちらに顔を向けもせずに言った。しかしレザは彼女に微笑みかけるように答える。

「大丈夫、ありがとう。でもちょっと毒の回りが早いみたいだ……」「死の森に長くいすぎたかもしれませんね。心配いりません。もうすぐ着きます」

レザはアリオンの肩越しに正面を覗き込んだ。はるか先のほうに大陸が広がっているのが見えた。飛行時間と方向からして、クルヒスト大陸の南西の辺りだろうか。それを証拠に、クルヒスト最大の山脈であるルートリア山脈と思われるものがどっしりと構えている。トルカーの免許試験を受けたときにロフレスクから200キロほ

ど離れた島に行つたことはあるが、ここまで長距離の遠征をしたのは初めてだつた。トルカーで移動したのではここまで燃料が持たないだろう。それこそ昨年完成した飛行艇スカイロードがなければ来られない。

わき腹が痛むのもすっかり忘れ、レザは見たことのない美しい景色に目を奪われていた。雄大で、どこか懐かしい印象のある大自然。ロフレスク周辺にもかつてはこのような綺麗な風景が広がっていたのであるうか。

「降りますよ」

アリオンの言葉を合図に、キュレイが少しずつ高度を下げ始めた。どうやらルートリア山脈の中腹あたりを目掛けて降下しているようである。

それにしても、これからどこに連れて行かれるのかレザには皆目見当もつかなかつた。彼女の生まれ育つた村へ向かっているかとも思つたが、彼女が村に住んでいるのかどうかも分からぬ。

もつとも、それは行ってみれば分かることである。何より今は彼女に言われるがままについていく以外の選択肢はなかつた。事実上、自分の命は彼女の手の中にあるといつても過言ではないのだ。

色鮮やかな緑の樹海の上を飛びことしばらく。次第に近づく雄大なルートリア山脈の存在感に、レザは圧倒されていた。山の頂が非常に鋭利で、まるで尖塔のような形のものもある。そうかと思えば緩やかな曲線を描いて延々と広がりを持つものもあり、見ているだけで心躍るような山並みだ。

クルヒスト大陸はこのような大きな山々を多く有している。そのため常に谷間から吹き抜ける風が、時として人々の生活に災害をもたらしてきた。この大陸ではその風を神として崇める信仰が今でも盛んであり、『風の神』の神話が星の数ほど存在している。

もつとも、そのような自然神の信仰は、なにもクルヒストに限つたことではない。例えば豊かな大地を持つフォルン大陸では昔から『地の神』の信仰が盛んに行われてきた。急速な発展のために森の

生態系が崩れ、ロフレスク王国に異形な生物がやつてくるようになつたのが、『地の神』の祟りであると信じている人は、王国内において決して少数ではない。それだけ地域に根付いた自然神の信仰というものは、どこの大陸にもあるのだ。

レザが辺りを見回しているうちに、キュレイは木の生い茂つた崖の一角を目掛けて降下していた。人為的に作られたものか自然にできたものなのかは分からないが、細々とした枝を持つ背が高い木々がアーチ状に伸び、トンネルのような道を作り上げているのが見える。恐らくそこがキュレイの巣なのであるう。もしくはアリオンもそこで生活を共にしているのだろうか。

「降りますから、しつかり掴まっていて下さい」

アリオンに言われ、レザがキュレイの背中にしがみつく。それとほぼ同時に、キュレイは大きく翼を広げて着地の態勢を取った。

山を吹き抜けていく風に乗り、ふわりと滞空するキュレイ。そのおかげで着地時の衝撃はレザが予想していたよりも少なかつた。降りるというよりは、乗ったという表現のほうが合っているかもしない。

レザが着地に備えて身構えているのを尻目に、アリオンはキュレイの脚が地に着くや否や、その背中から飛び降りていた。

「ここで待つていてください」

そう言い残し、アリオンがトンネルの奥へと姿を消す。

それを見送つてからレザはキュレイの背から降りた。地面に足をついた瞬間、バランスがうまく取れずによろめく。オニグモの毒のせいで足の先が痺れているのだ。足だけでなく、手の指先も感覚がなくなつてきている。

「まいったな……」

よろよろとした足取りで崖のふちに移動し、今一度あたりの景色を眺めてみる。フォルン大陸にはあまり高い山がないため、こうしてのんびり大地を見下ろすというのは初めての体験だつた。

山の麓には大きな湖があり、その中心に祠が立っているのが見え

る。それ以外には特に田ぼしいものが見当たらなかつた。村や集落があるわけでもなく、ましてや大きな街などもない。あるのは自然に支配された緑の風景のみである。

レザは踵を返すと、キュレイの元へと戻つていった。改めて見るとなんとも巨大な鳥である。今は大人しくしているが、ロフレスク襲撃の際には口から吐く火の玉に誰もが恐怖していた。

しかしこぞこぞして近くで眺めてみると、そして凶悪そうな感じではない。黒く大きな目など吸い込まれそうなほど美しく輝いているのだ。

「ちょっと……『メン』よ」

レザが腰を低くしながらキュレイの正面へ近づき、恐る恐るくちばしに触れてみる。キュレイは別に嫌がる様子ない。むしろ表情が和んでいるかのようである。そのままくちばしを撫でてやると、目を閉じてリラックスしたような仕草をとつた。

どうやらあまり嫌われているわけではないらしい。レザはわき腹の痛みにかすかに表情を歪めながらも、キュレイの可愛らしい様子に口元を緩ませた。

ちょうどその時、アリオンがトンネルの奥から姿を現した。そしてレザとキュレイの様子に目を丸くしながら「あつ」と小さく声を上げる。驚いたレザは慌ててキュレイのくちばしから手を離すが、アリオンは小さく咳払いをしてから、何事もなかつたかのように口を開いた。

「長老から許可が出たので、ひとまず村にきてください。解毒剤がありますから

「うん、ありがとう」

レザは、まずアリオンが村の中で暮らしているといふことに驚きだつた。しかしそれ以上に驚くべきことは、自分がすんなり村に入れるということである。何よりロフレスクはアリオンにとつて敵である。ということは、村人たちにとつてもロフレスクには何かしらの敵意があるに違いない。それなのに、ロフレスクの人間であるレ

ザが受け入れられるというのはどういう事情であろうか。

口ではお礼を述べながらも、レザは内心かなり警戒していた。もしかするとアリオンは村人にレザの素性を話していないのかも知れないが、いざれにしろ油断は禁物である。村に入つた瞬間バツサリやられてしまうのだけは御免だつた。

無言で歩き出したアリオンの背を追つて、レザはトンネルに入ろうと足を踏み出した。しかし毒の痺れのせいで足が思うように動かない。やつとのことで一歩前に出るものの、とてもまともにアリオンの後を付いていくことなどできそうになかった。

オニーグモの毒の強烈さも原因だろうが、やはり死の森にマスクもせずに長居したことが大きな要因だった。自然というのは汚染されるにしてもゆっくりと時間をかけて進むものであるが、あの森の毒氣は異常なほど急速に広まつたのである。

必死にアリオンの姿を田で追いながら、薄暗い植物のトンネルを進むことしばらぐ。山の斜面にポツカリと口を開けた洞窟に入つていぐ。

洞窟の中に日の光は届いていなかつたが、とにかくこれで這つている薦が発光しているおかげで、全く何も見えないとつまどん暗さではない。

「……大丈夫ですか？」

さすがにレザのことが気になつたか、アリオンが振り向き、心配そうに声をかける。

なんて優しい子だらう。レザは素直にそう感じた。

先ほどまで刃を交えていたとは、とても思えない。少なくともレザは彼女を敵であると思つていたし、彼女もレザに対して憎悪を抱いていたことだらう。

もしかすると、本当は優しい性格の持ち主なのかもしれない。しかし、何か大きな理由があつて口フレスクを襲つたとすれば……。

アリオンへの敵対心はすっかり消え失せ、レザはアリオンが自分の国を襲う理由を探つてみたくなつた。それを聞き出すことで、ア

リオンと対立をなくす解決策が見つかるかもしれない。そんな期待を抱いていた。

「なんとか大丈夫。ありがとう」

表情を歪めながらも、ぎこちなく笑顔を浮かべてそう答える。

しかし、そんな作り笑いでは隠せないほど、レザの様子は苦しそうだったのである。アリオンはスッとレザの横に並び、

「肩、貸します」

と小さな声でつぶやきながら、レザの体を支えた。

真珠草で作った香水だろうか。自然の甘い香りがふわりと漂う。昔はロフレスク周辺にも多く見られたらしいが、レザは野生の真珠草というのを見たことが無かつた。ただ、母親が若い頃によく真珠草の香水をつけていた、と父親のコルダから聞かされたことはある。レザには母親がいない。レザが幼い頃に、重い病で倒れたと、コルダは言っていた。ロフレスクの自宅の裏に、母親の小さなお墓がちょこんと建つており、そこにかけられた母親の形見のペンダントだけが、レザにとつて唯一の母親の姿だった。

そのせいだろうか。アリオンに対し、安らぎを感じてしまう自分がいるのだ。

「もうすぐ着きます」

アリオンに言われ、レザは顔を上げた。いつの間にか、ずいぶんと歩いていたらしい。洞窟の幅が広くなり、わずか先に光が溢れていた。

出口を覆う植物を掻き分け、洞窟の外へと足を踏み出す。

「……すごい」

一瞬、毒による苦痛をも忘れ、レザが感嘆の声を漏らした。

大樹の隙から降り注ぐ陽光に照らされ、小さな集落が姿を現す。それはまさに自然との共存といつてもいいかもしれない。洞窟の先には、それまでレザが見たこともないほどの巨大な木々や草花があり、その間に家が建っているという状態だ。

洞穴はちょうど崖の側面に口を開けており、その集落一帯の周り

も高い崖で覆われている。まるでその集落が一つの広場であるかのように。

「いらっしゃりく

レザが絶句しているのを尻目に、アリオンが腕を引いて集落の方へと歩いていく。

行き先は、なんとなく予想がついていた。歩く先のほうに、ひとり大きな建物が見えている。大きな樹の脇に立つたその家は、半ば樹木を家の壁の一部としているように見えた。いや、その家が樹のほんの一部といったほうが正確かもしない。

レザはアリオンに体を支えられながら、その家の中に足を踏み入れた。

「クシユリ様、連れてきたよ」

アリオンにクシユリと呼ばれた人物は、大きな部屋の中央に敷かれた、やけに分厚いクッションの上にずつしりと腰を下ろしていた。年の頃なら……おそらく100歳に近いのではないかと思われる老婆である。額に深々と刻まれた皺が、その生きてきた年月の軌跡を物語っている。背は低く体も小さいが、えもいえぬ威圧感が部屋全体に充満していた。

その神をかたどった石像のようなクシユリが、レザの顔を見た瞬間に、わずかに表情を変えたことに、アリオンもレザも気づかなかつただろう。そのまま彼女はまじまじとレザの顔を眺めると、

「……飲ませてやりな」

部屋の隅にある棚を軽くあごで指し、そのまま口を固く結んでしまった。

アリオンは棚に並ぶ小瓶の一つを取ると、中に入っていた小石ぐらの丸薬をつまみあげた。オニグモの毒に対する解毒剤はの虹色ガメの甲羅を削つて作ったものが一般的だが、どうやらその薬は違うらしい。甲羅を原料とする薬は淡い水色をしているのだが、こちらの薬は白に近い黄色といったところか。

「神鳥の……キュレイの羽毛を煎じて丸薬にしたものです。飲んで

ください」

キュレイの羽毛から作られたといつのも驚きだつたが、何よりもアリオンがキュレイのことと神鳥と言つたことに、レザは驚きを隠しきれなかつた。

あの鳥が神の使いだというのだろうか。確かに、いわゆる怪鳥と呼ばれるタイプとは、どこか違つことはレザにも分かつてゐた。それこそ体が大きいだけの鳥ならば、ロフレスク大陸の小さな山脈にも生息しているのだ。

しかしキュレイは違う。知能も高く、姿も神々しく、炎を吐ぐ。神鳥といわれれば、納得せざるを得なかつた。とはいえ、神鳥といふのは世界に数羽しかいないという神々の産物である。それがこのよつな山奥の小さな村で、アリオンのような少女とともにいるとは……。

レザが口を開けると、アリオンは丸薬を入れてやつた。決して美味しいとはいえない。パサパサとしていて、口の中がザラつく感じさえする。しかし気のせいだらうか。口を起点に、体中がスーっと軽くなつていくのだ。

昔から、神鳥の体は薬の塊だと言われている。『神鳥の肝を食べれば不老不死になる』のようなありきたりなことが、多くの伝説書や医学書などの記述されているのだ。

1000年ほど前は数の多かつた神鳥も、不老不死を求める人間の乱獲のせいで減つてしまつた、という学者もいる。

しかし実際はそうではない。確かに神鳥は昔に比べその数を減らしていると言われているが、神鳥は人間に殺されるほど弱い存在ではないのである。誰も神鳥を殺すことができなかつたからこそ、不死老不死などという噂が一人歩きしたのだろう。

「……アリオン、少し外しておくれ」

クシユリの言葉に、アリオンは目を丸くした。しかしそくに口クリとうなずくと、レザの顔を目の端で確認しながら、静かに外へ出て行つた。

「まあまあ、座りんさい」

そう促され、レザは倒れこむようにして床に腰を下ろした。不思議なことに、先ほどよりもずっと痛みや痺れは少ないのだが、体が妙に重い。それでもレザは平然とした顔をして真っ直ぐとクシユリのほうを向いて座っていた。

クシユリはしばらくの間、なにやら口をモゴモゴと動かしていたが、やがてふと顔を上げ、口を開いた。

「何をしにこの村にきたのだ」

それはレザがまったく予想していなかつた問いかけだった。

何しろ、別に自分で来ようと思つてきたわけではない。アリオンに連れたこられたから、ここにいるのである。それはクシユリもアリオンから話を聞いて分かつているのではないのだろうか。

しかし、クシユリが何かレザに対して懐疑心を抱いているというのも、口調や仕草からうかがい知れた。レザに不信感を寄せる特別な理由があるのか、もしくはただ外部の人間にに対して排他的であるだけか……。

「怪我をして動けなかつたところを、アリオンに助けられました」とりあえずレザは素直に答えた。しかし、クシユリからの反応は何もない。ただ高齢のせいでもうろくしているというわけでもないのだろう。

彼女が口を開かないのを見て、今度はレザが訊ねる。

「なぜ彼女は……アリオンは、ロフレスク王国を襲うのですか。あんな女の子が……」

クシユリは細い目をわざかに見開いた。

吸い込まれそうなほど深い眼光を放つ瞳が、レザに向けられる。眼力だけで氣後れしてしまいそうな圧迫感。しかしそれに対しても、レザは決して怖じる姿勢を見せない。

そんなレザを見て、クシユリがかすかに口元を歪めた気がした。それが微笑んだのか、それとも嘲笑なのかはとても判断がつかない。そのまま彼女はゆっくりと口を開く。

「われら『深縁の民』は、オトコ、オンナとは呼ばぬ。壊し人、創り人……とは呼ぶがな。もつとも、お主には理解できなかろう」まるであざ笑うかのような口調。レザが何か言葉を発する前に、クシュリは続ける。

「アリオンは壊し人の道を選んだ。ただそれだけのことじゃ」レザには彼女が何を言っているのかが、まったく分からなかつた。そもそも、レザが過ごしてきた社会の文化とは違いすぎるのだ。細かく説明をしてもらえなければ到底分かるわけもない。しかしそれきり、クシュリは口を開かなくなってしまった。

レザは続けて聞こうとした。ロフレスクを襲う理由はなんですか、と。だがその言葉はレザの口を出ることがなかつた。ふいに体がフワリと浮くような感じに襲われ、意識が朦朧としてくる。今までに味わつたことのない強烈な睡魔だ。

「なあに、ただの薬の副作用だ」

そう言いながらクシュリは静かに目を閉じる。もつこれ以上話すことなどない、と言わんばかりに。しかし床に倒れこむレザの耳に、クシュリの声はすでに届いていなかつた。

レザが倒れこむ物音に気づいたアリオンが、おそるおそる中の様子を覗いていた。レザが完全に眠つているのを確認すると、そつと室内に足を踏み入れる。彼女はもの珍しそうにレザの姿を眺めると、「変わった人」と、小さな声でつぶやいた。

目を閉じていたクシュリの瞳がゆっくりと開かれる。じつとアリオンの顔を眺め、驚くほどハッキリとして口調で言った。

「気になるかい」

クシュリが何を意図しているのか分からず、一瞬戸惑いの色を浮かべるアリオン。しかしすぐに小さくうなづき、

「なんとなく……。部外者がここに来るのは初めてだし」と、言葉を濁しながらも答えた。

「まあ、国に帰してきておやり。その毒の進み具合だと、半日ほど

は起きんじや ろうて」

「……うん、行つてきます」

アリオンは小さくお辞儀をするとそのまま静かに部屋を出て行った。それからしばらくして、アリオンと同じぐらいの年齢と思われる少女を連れてくる。

短めの髪とハツキリした顔立ちが特徴的で、アリオンとは対照的に、活力にあふれた印象を持たせる。少年のような雰囲気を思わせるのだが、出るところはしつかりしており、背も体格もアリオンよりも少し大きかった。

「そんなに重そうじゃないから、2人で運べると思うんだけど……どう、ベーベル？」

「へ～、可愛らしい顔してるね」

ベーベルと呼ばれた少女は、アリオンの話などまったく聞かず、静かに寝息を立てるレザの顔を覗き込んだ。その様子を見て、アリオンが頬を膨らませてみせる。

「もう、ちゃんと聞いてよ……」

「はいはい、すぐカリカリしないの」

ベーベルにおでこを人差し指で突かれ、アリオンはさらに不機嫌そうな顔をした。非常に意外なことではあるのだが、どうやらアリオンは感情を隠すのが苦手らしい。微かに赤くなつたおでこをさすりながら、露骨ではないが、しかし目に見えて不満の表情を見せていた。

2人はゆっくりとレザの体を動かし、外へと運んでいく。家の前には、仔馬ほどの大きさはあるつかという白い犬が、座り込んで待っていた。

「行つてきます、クシユリ様」

レザを犬の背に乗せると、アリオンはクシユリに軽くお辞儀をし、ベーベルと共に歩いていく。元来た洞窟を戻り、キュレイの元へと向かうのだ。

洞窟を抜けると、キュレイは眠そうに地面に体を下ろしながら待

つっていた。そんなキュレイに近づく前に、ベーベルは足を止める。「怒られると嫌だしね。このへんで止まつとく」

アリオンはコクリとうなずくと、レザを乗せた犬を連れてキュレイの元へ歩み寄った。

後ろの方で待つベーベルの姿と、レザの姿とを交互に見る。アリオンは非常に不思議だった。キュレイは、アリオン以外の人間に対してはあまり気を許さないのだ。ベーベルがああして近づきたがらないのも、そういう理由がある。

しかしレザは……村に向かう前、キュレイに触れていた。しかもキュレイが最も警戒をする、正面から、である。

本当に、不思議な人……。

すやすやと眠るレザの顔をもつ一度ゆっくりと眺めながら、アリオンはキュレイの横に回った。

犬の背から、レザをキュレイの背に移す。本当に嫌いな人間が相手ならば、キュレイは決して背に乗せようとはしない。それなのに、レザを乗せようとしてもまったく嫌がる様子がないのである。

「行つてきます。すぐ戻つてくるわ」

「はいよー、お土産よろしくね」

呑気な口調でベーベルがパタパタと手を振りながら見送りをする。下に落ちないようにレザの体をしっかりと抑え、アリオンがキュレイの背中を撫でる。するとキュレイは大きく伸びをするかのように翼を左右に広げた。

この神鳥が飛び立つときの姿は、多くの地方や国で神格化されている、象徴的な姿である。この姿を模した紋章を掲げる王国などが、世界には多数存在するのだ。もつとも、アリオンは相棒が飛ぶ準備をしている、ぐらいにしか思つていらないだろうが……。

キュレイは姿勢を低くすると、大地を蹴つて上空に飛び上がった。レザの体がグラリと揺れるのをアリオンが慌ててしがみついて押さえる。

「お熱いね～っ！」

なにやら下のまつでベーベルがはしゃいでいたが、アリオンは顔を赤くしながら聞こえない振りをしていた。「落ちないように押さえてるだけだもの」と心の中で呟きながら。

海面よりはるか上空を飛びながら、アリオンはレザを連れてロフレスクを田指した。

レザはぼんやりと天井を眺めていた。どうやって運ばれてきたかは分からぬが、目を覚ますと自宅のベッドの上に横たわっていた。結局アリオンについて何も聞けぬまま戻つてしまつたことを、レザはひどく悔しんだ。しかし、彼女とはまた話す機会がある気がしていた。理由は分からぬが、すごく運命的なものを感じるのである。

ふと、戸棚の上に置かれた写真立てに目をやる。可愛らしい鳥の絵が描かれた枠の中で、コルダと、そして生まれて間もないレザを抱えて微笑む母親の姿が映つている。

レザは物心がついたころから、母がいなかつた。昔から体が弱く、病気で亡くなつた、とコルダからは聞かされている。気が強い反面、動物が大好きなやさしい一面もあり、中でも鳥が大好きだつたとう。

キュレイという神鳥に乗つて大空を飛びまわるアリオンに、どうか母親の影を求めているのだろうか。ベッドの上でレザは何度も自問自答した。

「目が覚めたか」

いつ帰つてきたのか、コルダがベッドの脇に立つていた。安堵の表情でレザの顔を上から覗き込む。氣まずさを覚え、レザは目を少しそらしながらボソリと言つた。

「……ただいま」

「まったく、無茶をする。そういう所は母親にそっくりだな」

溜息をつきながらそう言つと、コルダは台所に立つて何かを作り始めた。どこか嬉しそうな父親の背中を眺めながら、レザが思わず微笑む。昔から無茶な行動をすると、父親には嬉しそうな顔をしながら怒られていた。

今アリオンのことを話せば、父親は協力してくれるだろうか……。

しかし、コルダに話をしてしまつと、王国の上層部が絡んでくる可能性がある。再び自分自身でアリオンの元を訪れ、暗闇に埋もれた真相を掘り出すのが一番納得のできる道であることは間違いなかった。

しばらじして、レザはコルダとともに夕食をとった。もちろん、食前に地の神への祈りも怠らずに行つ。食事の前に手を合わせ、地の神への感謝の言葉を述べる。この国では、誰もが行う一般的な習慣だ。

今日のメニューはアカマキキノコのスープと、シロブタの肉とたっぷりの山菜を使った炒め物。食事作りレザとコルダが日替わりなのだが、レザはあまり料理が得意ではなかつた。それに比べてコルダの料理の腕は王国内でもむけよつとした噂になるほどだ。

「それでも、一体どこへ行つてどうやつて帰つてきたんだ」

スープを口に運びながら、コルダが足踏みするような口調で言つた。どうやらずっと聞くタイミングをつかがつていたらしい。

レザは悩んだ。当然そう聞かれることは覚悟していたし、多少は自分の見聞きしたことを話さなければならぬと思つていた。しかし、ざ質問されると、どうしても答えには詰まる。

なにしろアリオンは王国の敵として認識をされている存在である。その彼女にオーネグモから受けた毒の治療を受けて、ここまで送つてもらつたと言うのは……少し口が重い感じがする。何より真実を話した場合、父親がどのような反応を示すか検討がつかないのが怖かつた。

「明日から、鳥捕獲のための本格的な作戦が始まることになつた」  
レザが口を開かないのを見て、コルダはそう話を切り出した。その話は、少し前からレザも耳にしていた。確か作戦の指揮は北側の防衛団を任されているボーダンという男だつたと記憶している。

正直なところ、レザはボーダンという男が嫌いだった。彼は非常に好戦的ことで有名で、過去の作戦でも正当といえるような内容のものばかりではない。しかし、彼の作戦はよく成功する。荒々し

いながらも、ボーダンが防衛団の一角を任せているのは過去の実績の賜物だった。

恐らくアリオンが捕まってしまえば、牢獄行きか……最悪の場合は処刑もありうる。いずれにしろ無事では済まない事は確かだつた。そういうことは何としてでも避けたいが、過去にアリオンがロフレスクに対して破壊行為を行つてきたことも事実。レザが彼女の解放を訴えたりしようものなら、レザにも罰が与えられることは必至であろう。

「レザ、ちょっとは何か喋つたらどうだ。あまり難しい顔して考えこんでいると、頭がパンクするぞ」

「ルルダがそう言いながら右手でポンッと破裂するような動きをしてみせる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4107d/>

翼の上のアリオン

2010年10月8日23時58分発行